

『家路』 福島農民の静かな怒り



監督／久保田直 脚本／青木研次 企画協力／是枝裕和 諏訪敦彦 音楽／加古隆 出演／松山ケンイチ 田中裕子 安藤サクラ 内野聖陽 山中崇 田中要次 光石研 石橋蓮司 2014日本映画 製作／『家路』製作委員会 3月1日より新宿ピカデリーほか全国ロードショウ ©2014『家路』製作委員会

映画の紹介



●福島第1原発事故からまもなく3年、その間に無数の新聞記事、ルポルタージュ、ドキュメンタリー、テレビドラマが製作された。人びとはそれらを見て共感したり同情したり、乏しい財布をはたいて応分の寄付をしたりし

たが、一向に変わらない事態に次第に慣れ始め、「どこかで聞いたような」話に感動しなくなり、そのうち浮き世の雑事に紛れて関心を失って行く。どんな巨大な事件の後にも起こる風化現象が、進行しているのだ。

●しかし、当事者である福島住民（疎開者も含めて）にとっては、日々の生活の中で事故の重圧に直面している以上、風化も忘却もあり得ない。彼らの多くは突然、生活の基盤である仕事と長年住んだ家を奪われ、僅かな補償金と狭い仮設住宅と引き換えに、将来への何の見通しも与えられないまま放り出されているからだ。東日本大震災からの復興（それはそれで多くの問題を抱えている）のかけ声が高い中で、この地方だけはいわば国内第三世界化への道を辿っている。そのことをこの映画は改めて感じさせる。

●先祖伝来の農地を原発事故で失い、生きる目的をなくして仮設住宅で無為のまま暮らす長男の総一。妻の美佐は幼い娘を姑に預け、風俗店に働きに出ている。狭い仮設住宅に5人家族の暮らしは不自由で、夫婦の間は摩擦が絶えない。美佐は総一に訴える。「私たちは何か悪いことをした？ どうしてこんな風に罰せられなきゃならないの？」

●総一の腹違いの弟・次郎は、十数年も前に家出して音信不通だったが、ある日ひっそり帰郷する。心に期するところがあった次郎は、仮設住宅には寄らず、居住制限区域に指定されたかつての自宅に独りきりで住み込む。野

菜や苗を育て、田圃の手入れをし、家畜の世話をする。中学校で同級だった北村という青年が訪ねてきて、二人は無人地帯となった街や思い出のつまった中学校などを歩き回る。机、椅子だけが散乱する中学校の無人の教室が、起こったことの無残さを物語る。「ここで暮らして行くのは、ゆっくり自殺するようなものじゃないのか？」と問う北村に、次郎は「誰も居なくなったら、何もなかったことになる」と答える。

●総一は次郎が黙って帰郷して農作業を続けていることを人に教えられ、田圃にかけつけて思わず殴りかかる。だが、息子との再会を喜び、米の出来具合の話に熱中する母の姿を見ると、怒ってばかりもいられない。総一は母親を次郎にまかせ、別の土地で新しい生活を始めることを考え始める。

●ドキュメンタリー出身の監督の作品らしく、丹念な映像の積み重ねと控えめな台詞によって静かな怒りが見る者に伝わる。終わり近くに、二人の警官が作業中の次郎に声をかけようとして思いとどまる場面があるが、筆者にはジャン・ルノワールの秀作『大いなる幻影』（1937年）のラストシーンが思い出された。雪の斜面を登って行く二人の脱走兵に国境守備兵が銃口を向けた時、将校が叫ぶ。「撃つな。あそこはスイス領だ」。さて、福島の立ち入り禁止区域は、農民のサンクチュアリ（聖域）になり得るだろうか。

本野義雄（もとの・よしお／本誌編集委員）